
いつもの部活

丹羽凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつもの部活

【Nコード】

N8567T

【作者名】

丹羽凜

【あらすじ】

いつもの部活のいつもの風景。笹本さんと僕の話。

「なにがいいと思う？」

そう聞いてきたのは、わが部長である笹本さんだ。学校の隅にぽつんと存在する演劇部の部室は、長机の周りに椅子が4つあるだけで一杯になってしまうほど狭い。そんな中で、向き合いながら喋ることにドキドキする僕の気持ちはいたって普通だと思う。なにか間違いが起こってしまっても不思議ではない――のに何も起こらないのはきつとキューピットとやらが、長期休暇にでも行ってしまったのだろう。

「やっぱり、劇っていえばヒーロショーでしょ」

「それって、子供じみてない？」

「いやいや。全然子供じみてなんてないですよ。子供と一緒に楽しめる劇のほうがいいですし、派手なアクションシーンがあったほうが見栄えますよ。それに、シリアスな劇やったって、学園祭じゃ盛り上がりませんよ」

この意見に納得したのか、それもそうねと褒めてくれた。笹本さんが褒めてくれるのは非常に珍しく、顔がにやけてしまう。

「どんな感じの話にするの？」

「そりゃ、悪役をこうギッタンバッタン倒していくんですよ」
身ぶり手ぶりも加えて説明するが、笹本さんは却下の一言。

「そんなありきたりの話を私が作るわけ？ 嫌よ」

「でも、戦隊モノって大体そんなじゃないですか」

「だとしたら、もっと頭を捻りなさい」

そう言われても、ない頭をこれ以上捻ったところで何かが出で来る様子もない。かろうじて出てきたのは、笹本さんとの甘い生活のみで（もちろん、僕の妄想なわけだが）危うく出そうになった言葉を堪えるのみだ。

「まず、主人公よ。案はない？」

「主人公ですか……。やっぱ五人いたほうがいいのかな」

日曜朝7時のテレビを思い出す。

「主人公がそんなにいたって、話がまとまらないだけよ。しかも、そんなに部員がいらないわよ」

「死活問題ですね」

「もう死んでるんだけどね」

確かに部員はいない。というより、部活として成立する5人すら集まっていない。しかし、部室はあるという不思議な状況だ。校長が昔演劇部に入っていたから、許可が下りたのかなんとか。ものすごい適当である。部員の数4名で、僕と部長である笹本さんは普通だとして、残る二人がおかしい。一人は顧問の山野先生である。山野先生は新任で、この学校の教師はどこかの部活動の顧問をする必要がある。そのため、校長に抜擢されたらしい。先生が部員として入っているのかという疑問があるが、校長が決めたのだから仕方がない。そして残る一人は、その校長である。この学校の行く末が大変不安である。

この学校の未来を考えても仕方ないので、劇について考える。僕がいろいろ考えている間に、笹本さんは鞆からノートを取り出し、何かを書き始めていた。

「なに書いてるんですか」

「主人公よ。こんな感じでどう？」

僕はノートを覗き込む。

暴虐のピンク 武器はムチ 言葉攻め ドS

財力のイエロー お金ですべてを解決する ドS

長万部ブルー 普通の人 SでもMでもない いじめられ役

突っ込みどころ満載で何を突っ込むべきか悩む。ヒーローのプロフィールにSとMは必要ないであろうに、ブルーに至ってはわざわざSでもMでもない表記してある。その前に長万部ってなんだ？なぜ、長万部なんだ？しかもいじめられ役って……。ヒーローがそんなんでもいいのか。しかもピンクはどことなくエロい。言葉攻めっ

ていう単語だけで妖艶なお姉さんが僕の網膜だけに表示されるのだが、僕には笹本さんという決めた人がいるため、その妄想を隅に追いやる。決して、消してしまうような愚かなまねはしない。そして、イエローは最早悪役なのではないか。お金で解決って、基本的に悪だと相場が決まっているのに、これでいいのだろうか。そして、全体を通していい奴が一人もいないということが問題である。

だが、何よりもこれを指摘しなければならない。

「おかしいでしょ。レッドがいません」

突然吹き出す笹本さんだが、僕の顔はいたって普通だ。

「突っ込むところおかしいでしょ」

笹本さんは腹を抱えながら、机をバンバンと叩く。

「じゃあ、悪役をレッド伯爵としましょ。部長命令は撤回不可よ」

「そんな」

うなだれる僕に優しい声をかけてくれる人はいない。不満を垂れながらも話は進む。

「だとしても、ブルーはおかしいでしょ。存在意義がわかりません」

「給料がいいから仕方ないのよ」

「給料制なんですか？」

「しかも、任期1年の仕事よ」

給料のためにいじめられ役をかってでるとは、なんて人なのだろう。親父がそんなだったら見てられない。そんなやつを親父だと認めたくない。しかし、そんなことを言ったら母親に「あんたを養ってくれている人になんてことを言うの」なんて怒られるのだろう——などと妄想はここまでにしておこう。

「もうちょっとまともな人いないんですか」

「まともだと、面白くもなんともないわよ」

「そうですけど……」

「いいのよ。どうせ部員が足りなきゃ仕方ない話なんだから。今日の話はここまで。もう遅いし、帰るわ」

時計を見ると6時前だ。あたりは少し暗くなり始めている。

「送っていきます」

「いいよ。すぐ近くだし」

笹本さんの家は、学校の裏門から徒歩3分という場所に建っている。一方僕の家は、自転車で30分で意外と遠い。しかもこの時間だと一人で帰るため、さらにつらい。彼女を自転車の後ろに乗せて、一緒に帰るなんて夢見ていたのに、この状況ではそれもできない。できたとしても1分もないわけで、それはそれでものすごく悲しい。

「男として、夜道を女の子一人で歩かせることはできません」

なんやかんや理由をつけて、いつも僕は笹本さんを送っていく。さよならと言うまでのわずか3分。それが僕にとって重要なのだ。雑談するだけで、手をつなぐこともない。笹本さんの横を、自転車を引きながら歩く。

願わくば早くキューピットが返ってきて、僕の日常を少しだけハッピーにしてくれないだろうか？

(後書き)

感想あればいいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8567t/>

いつもの部活

2011年10月8日23時13分発行